

1.	消化管は、口腔から肛門まで続く管で、平均的な成人で全長約9 mある。
2.	消化液に含まれる消化酵素の作用によって、飲食物を分解することを機械的消化という。
3.	舌の表面には、舌乳頭という無数の小さな突起があり、味覚を感知する部位である味蕾が分布している。
4.	大腸内には腸内細菌が多く存在し、腸管内の食物繊維（難消化性多糖類）を発酵分解する。
5.	副鼻腔は、薄い板状の軟骨と骨でできた鼻中隔によって左右に仕切られている。
6.	表皮は、線維芽細胞とその細胞で産生された線維性のタンパク質（コラーゲン、フィブリン、エラスチン等）からなる結合組織の層である。
7.	胃では、副交感神経が活発になると胃液の分泌が亢進する。
8.	歯冠の表面は象牙質で覆われ、象牙質の下にはエナメル質と呼ばれる硬い骨状の組織がある。
9.	脳における血液の循環量は、心拍出量の約15%、ブドウ糖の消費量は全身の約25%、酸素の消費量は全身の約20%と多い。
10.	副腎髄質では、自律神経系に作用するアドレナリンとノルアドレナリンが産生・分泌される。
11.	骨は生きた組織であり、成長が停止した後は破壊（骨吸収）と修復（骨形成）が行われなくなる。
12.	散剤を服用するときは、飛散を防ぐため、あらかじめ少量の水（又はぬるま湯）を口に含んだ上で服用したり、何回かに分けて少しずつ服用するなどの工夫をするとよい。
13.	有効成分と血漿タンパク質との複合体は、腎臓で濾過されやすくなり、尿中へ速やかに排泄される。
14.	アルブミンは、血液の浸透圧を保持する働きがある。
15.	胆汁に含まれるビリルビンは、赤血球中のグロブリンが分解された老廃物である。
16.	飲食物を飲み込む運動（嚥下）が起きるときには、喉頭の入り口にある弁（喉頭蓋）が反射的に開くことにより、飲食物が喉頭や気管に流入せずに食道へと送られる。
17.	原因と考えられる薬物を漫然と使用し続けると、不可逆的な病変（肝不全）を生じ、死に至ることがある。
18.	坐剤は、内服の場合よりも全身作用が現れるのが遅い。
19.	目では、交感神経系が活発になると瞳孔が収縮する。
20.	食品から摂取あるいは体内で生合成されたビタミンDは、腎臓で活性型ビタミンDに転換されて、骨の形成や維持の作用を発揮する。
21.	脳の血管は末梢に比べて物質の透過に関する選択性が低く、タンパク質などの大分子や小分子でもイオン化した物質は、血液中から脳の組織へ移行しやすい。
22.	胃は、食道から内容物が送られてくると、その刺激に反応して胃壁の平滑筋が弛緩し、容積が広がる
23.	肛門には動脈が細かい網目状に通っていて、肛門周囲の組織がうっ血すると痔の原因となる。
24.	結膜の充血では白目の部分だけでなく眼瞼の裏側も赤くなるが、強膜が充血したときは眼瞼の裏側は赤くならない。
25.	血管系は閉鎖循環系であるのに対して、リンパ系は開放循環系である。
26.	喉頭から肺へ向かう気道が左右の肺へ分岐するまでの部分を気管支といい、そこから肺の中で複数に枝分かれする部分を気管という。
27.	小さな子供では、耳管が太く短くて、走行が水平に近いため、鼻腔からウイルスや細菌が侵入し、感染が起りやすい。
28.	胃で分泌されるペプシノーゲン（ペプシノーゼン）は、胃酸によりペプシンとなって、脂質を消化する。
29.	間質性肺炎は、気管支又は肺泡が細菌に感染して炎症を生じたものである。
30.	ショック（アナフィラキシー）は、生体異物に対する即時型のアレルギー反応の一種であるが、発症後の病態の進行は比較的緩やかである。
31.	中毒性表皮壊死融解症の症例の多くが皮膚粘膜眼症候群の進展型とみられる。
32.	喉頭は、発声器としての役割もあり、呼気で喉頭上部にある声帯を振動させて声が発せられる。
33.	リンパ球は、血液中の白血球の中で最も数が多く、白血球の約60%を占めている。
34.	水晶体は、その周りを囲んでいる毛様体の収縮・弛緩によって、遠くの物を見る時には丸く厚みが増し、近くの物を見る時には扁平になる。
35.	消化管壁を通っている毛細血管の大部分は、門脈と呼ばれる血管に集まって肝臓に入る。
36.	血漿は、90%以上が水分からなり、アルブミン、グロブリン等のタンパク質のほか、微量の脂質、糖質、電解質を含む。
37.	血液の粘稠性は、主として血漿の水分量や血中脂質量で決まり、赤血球の量はほとんど影響を与えない。
38.	黄疸は、ビリルビン（黄色色素）が血液中へ排出されず、胆汁中に滞留することにより生じる。
39.	イレウス様症状が悪化すると、腸内細菌の異常増殖によって全身状態の衰弱が急激に進行する可能性がある。
40.	偽アルドステロン症は、体内にカリウムと水が貯留し、体からナトリウムが失われることによって生じる病態であ

	る。
41.	内耳は、平衡器官である蝸牛と、聴覚器官である前庭からなり、いずれも内部はリンパ液で満たされている。
42.	循環血液中に移行した有効成分は、血流によって全身の組織・器官へ運ばれて作用するが、多くの場合、標的となる細胞に存在する受容体、酵素、トランスポーターなどのタンパク質と結合し、その機能を変化させることで薬効や副作用を現す。
43.	医薬品を十分な間隔をあけずに追加摂取して血中濃度を高くしても、ある濃度以上になるとより強い薬効は得られなくなり、有害な作用（副作用や毒性）も現れにくくなる。
44.	皮膚粘膜眼症候群は、38℃以上の高熱を伴って、発疹・発赤、火傷様の水疱等の激しい症状が比較的短時間のうちに全身の皮膚、口、眼等の粘膜に現れる病態である。
45.	無菌性髄膜炎は、早期に原因医薬品の使用を中止しても、予後は不良となることがほとんどである。
46.	偽アルドステロン症は、副腎皮質からのアルドステロン分泌が増加することにより生じる。
47.	高血圧や心臓病等、循環器系疾患の診断を受けている人は、心臓や血管に悪影響を及ぼす可能性が高い医薬品を使用してはならない。
48.	薬疹は医薬品の使用後「1～2週間」で起きることが多い。
49.	髄膜炎のうち、髄液に細菌が検出されないものを無菌性髄膜炎といい、大部分は真菌が原因と考えられている。
50.	間質性肺炎は、一般的に医薬品の使用開始から1～2時間程度で起きることが多い。

2章 ○×-3 こたえ

番号	解答	解説 (×のみ)
1	○	
2	×	機械的消化ではなく、「化学的消化」
3	○	
4	○	
5	×	副鼻腔ではなく、「鼻腔」
6	×	表皮ではなく、「真皮」
7	○	
8	×	歯冠の表面は「エナメル質」で覆われ、「エナメル質」の下には「象牙質」と呼ばれる硬い骨状の組織がある
9	○	
10	○	
11	×	成長が停止した後も一生を通じて破壊（骨吸収）と修復（骨形成）が行われている。
12	○	
13	×	腎臓で濾過「されない」ため、有効成分が長く循環血液中に留まる。
14	○	
15	×	グロブリンではなく、「ヘモグロビン」
16	×	反射的に開くのではなく、「反射的に閉じる」
17	○	
18	×	遅いのではなく、「速やかに現れる」
19	×	収縮ではなく、「散大」
20	○	
21	×	脳の血管は末梢に比べて物質の透過に関する選択性が「高く」、タンパク質などの大分子や小分子でもイオン化した物質は、血液中から脳の組織へ移行「しにくい」。
22	○	
23	×	動脈ではなく、「静脈」
24	○	
25	○	
26	×	「気管支」と「気管」が逆
27	○	
28	×	脂質ではなく、「タンパク質」
29	×	記述は、「通常の肺炎」の内容なので誤り。間質性肺炎は、「肺の中で肺胞と毛細血管を取り囲んで支持している組織（間質）」が炎症を起こしたものである。
30	×	比較的緩やかではなく、「非常に速やか」
31	○	
32	○	
33	×	60%ではなく、「約1/3」
34	×	「近く」の物を見るときには丸く厚みが増し、「遠く」の物を見るときには扁平になる。
35	○	
36	○	
37	×	血液の粘稠性は、主として血漿の水分量や「赤血球の量」で決まり、「血中脂質量」はほとんど影響を与えない。
38	×	黄疸は、ビリルビン（黄色色素）が「胆汁中」へ排出されず、「血液中」に滞留することにより生じる。
39	○	
40	×	体内に「ナトリウム」と水が貯留し、体から「カリウム」が失われることによって生じる病態である。
41	×	「聴覚器官」である蝸牛と、「平衡器官」である前庭
42	○	
43	×	「現れにくくなる」のではなく、「現れやすくなる」
44	○	
45	×	早期に原因医薬品の使用を中止すれば、「速やかに回復し、予後は比較的良好」である
46	×	アルドステロン分泌が「増加していないにもかかわらず」生じる。

47	○	
48	○	
49	×	真菌が原因ではなく、「ウイルス」が原因
50	×	1～2時間ではなく、「1～2週間」